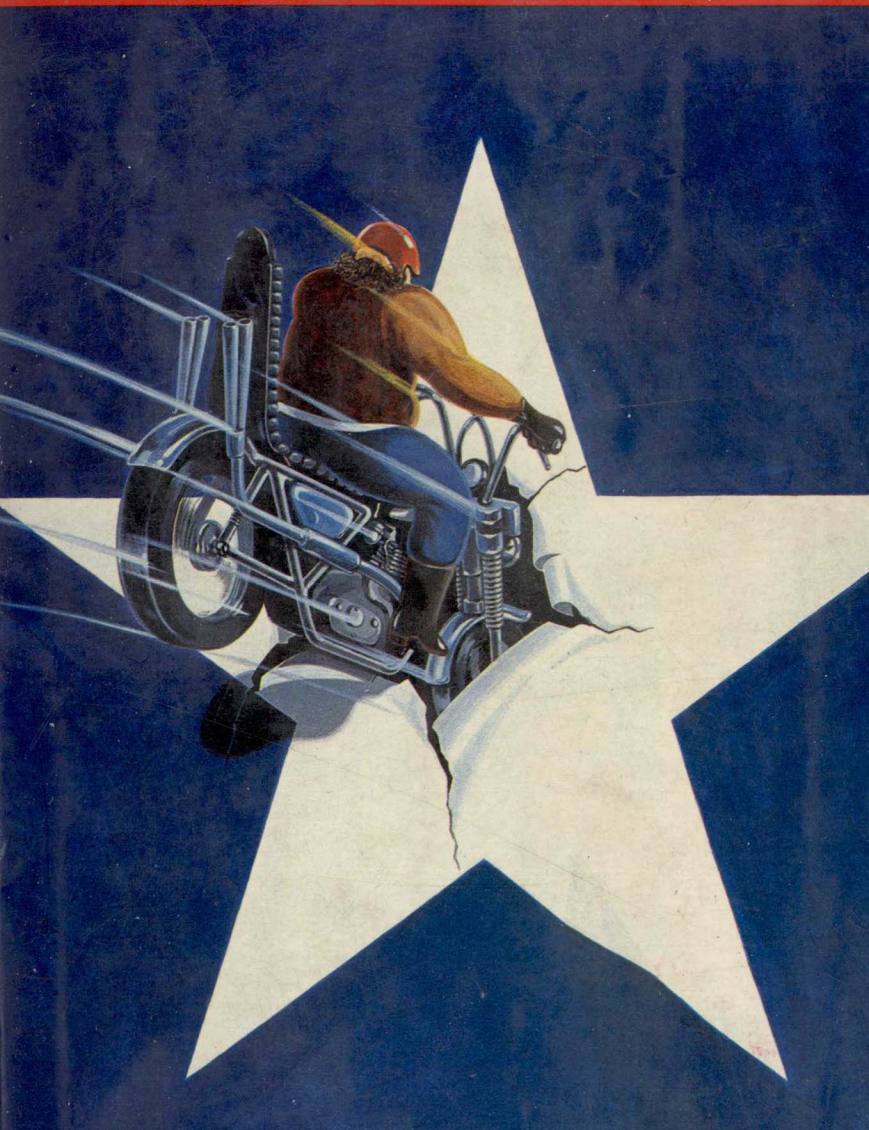
今日の海外小説　NOVELS NOW

されど我らいまだ救われ

キャロル・ヒル　須山静夫＝訳　河出書房新社



今日の海外小説

されど我らいまだ救われず

キャロル・ヒル　須山静夫＝訳

河出書房新社

JEREMIAH 8：20
Copyright © 1970 by Carol Hill
Japanese translation rights arranged
through Charles E. Tuttle Co., INC.

されど我らいまだ救われず © 1974

初版印刷　1974年2月25日
初版発行　1974年2月28日

訳　者　須山静夫
発行者　中島隆之
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町3の6
Tel. 292／3711　振替 東京 10802

印刷／中央精版印刷株式会社　製本／有限会社黒田製本所
定価は帯・カバーを御覧下さい

されど我らいまだ救われず

情熱的な動揺の時代は、すべてのものを破壊し、すべてのものを引き倒す。しかし、革命の時代は内省的であると同時に情熱もなく、すべてのものを現状のままにしておくが、たくみに意味を奪い取って空虚にしてしまう。

ゼーレン・キルケゴール

そして、これらすべての神秘は私にとって何を意味するのだろうか。それらの生命は指数や無理数で満ちているのである。$\chi^2+7\chi+53=11/3$

チャールズ・ドジソン尊師
（ルイス・キャロル）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

第
I
部

収穫の時は過ぎ、夏もはや畢りぬ。されど我らはいまだ救われず。

エレミヤ記　第八章二十節

ジェレマイアー！　マイアー！」

彼ハ銃声ガ響キワタルノヲ聞イタ

時刻ハ八時二十分デ、彼ハヒタ走リニ走ッタ

森ハ激シク衝突シアイ、生イ茂ッタ樹ハブツカリ

ソレカラ彼ハヤミクモニ自分ヲ狩リ出ソウトスル声ヲ聞イタ。ソノ声ハ清メラレタ雪ノヨウニ純粋ニ、清ラカニ、黒々ト膨脹シタ。

ジェレマイアー！　マイアー！

ソノ声ハ膨脹シテ高ク昇リ、大空ノ針ニ突キアタッテガラスノヨウニ砕ケ散リ、彼ノ模索ノ前ニ立チハダカッテ小サクキラキラト輝キ、名前ヤ、言葉ヤ、名称ヲ持ッタ物ヤ、呼ビ出サレタ物ガアラワレ出テ、ソシテ、サマザマナ形象ハ逃ゲ失セタ。彼ハ駅ノプラットフォームニ立ッテ読ンダ。

グリーンオーヴァー駅

彼ハ目的地ニ着イタノダ。

イヤ、彼ガソウ思ッタダケダ。彼ノ記憶ハソンナモノダッタ。ソレニモカカワラズ、ジェレマイア・フランシス・スキャンロン、フトッテ、頭ガ禿ゲカカリ、三十九歳ニナルコノ男ハ、階段ノホウニ近ヅイテ行クトキ、悲シゲニ頭ヲ振リ、思イマドッテイタ。ナゼナラバ今朝彼ハ何カ別ノコトヲ感ジ取ッテイタカラダ。彼ハ今マデ夢ヲ見テイタノダロウカ？　今ノコトハ現実ニオコッタノダロウカ？　コノ争イハ決シテ静マラナイノダロウカ？　彼ハ廊下ノホノカナ明リノナカデフタタビマタタキヲシテ、ドノ部屋ニハイルドアモ閉マッテ鍵ガカカッテイルコトニ気ガツイタ。コレハホントウニオコッタコトナノカ？　彼ニハワカラナカッタ。ナゼナラ、タシカニ彼ハ今マデニ何度モコウイウフウニシテコノ駅ノナカニ立ッタコトガアルカラダ。ソレニモカカワラズ。ソレニモカカワラズ彼ハ下宿人デアリ、今、アル下宿屋デ目ヲサマソウトシテイルノダ。ソレハキワメテ単純ナコトデハナイカ？　ソレナラバナゼコノ感覚

駅ダ。ソレガイケナイノダ。ヨク知リツクシテイルノダガ、ドコトモワカラナイノデ、彼ノ混迷ガ促進サレルノダ。時間ヲ彼ハ切断シナイデイラレルシ、マタ切断シナイダロウ。シカシ、場所、ハッキリドコト定マラナイ場所ハ？　コレトイッテ特徴ノナイ場所。コレガ彼ノ気力ヲ失ワセタ。ソレカラ彼ハモウ一度ママタキヲシテ、大キナ体ヲ動カシ、不

格好デ衰弱シキッタマストドンノヨウナ巨体ヲ揺ルガセ、埃ッポイ床ノ上ニ人々ガツクッタ稀薄デ大キナ決マッタ道ニ両足ヲ置キ、ソレカラ、マサグルヨウニシテ階段ノホウヘ進ンデ行ッタ。

1

今は十一月で、廊下には冬の朝の湿っぽい光がしのびこんできていたが、依然としてほの暗く、幾晩も前からのタバコの煙でまだどんよりとくすぶっている客間の埃っぽい空気を通して太陽はゆっくりとくすぶっていた。いくつかの使い古した椅子は互いに調和が取れず、継ぎはぎだらけで、絹の布を切って作った薔薇の模様が木綿のギャバジンに縫いつけてあり、かすかに消えて行くさまざまな切望に困惑していた。朝の光は木造の部分をも抱きこんでいた。

「またわたしのほかにはだれもいないんですか？」とフランシスは言って、テーブルに近寄った。

「そうよ」とミセス・フリンは言い、よごれた服を着て、ぬかるみのなかを歩くようにして部屋にはいってきた。フリンという女には特有なにおいがあった。悪臭だと思うのは失礼だとフランシスにはわかっていたが、やはり失礼して、この女は臭いと彼は思った。彼女のにおいは胸をむかつかせた。それに、この女の淫らな指は完璧な平静を保って、腐りかけた野菜と肉をかきまわすのだ。

「卵はどうするのがいいの？」

「目玉焼きですな」と彼は言った。

「目玉焼きね、あんたのは」と彼女は言って姿を消した。

彼はそこに腰かけてジュースを飲み、もしほかに下宿人がいるならば、その人たちにはほんとうにいつ会うのだろうかと思った。新聞広告には《フリンの下宿人たち》と書いてあった。たしかにほかの住人がいるのだ。

「武器を取れ、武器を取れ、と反逆者たちは叫んだ」か、あるいは、少なくとも彼らはそう叫ぶべきだったとマイルズは考えながら、三角帽をぱっと頭にかぶって鏡の前にとまり、固まったマスカラが片方の目の隅から落ちそうになるのを捕えた。「悪くはないぞ、悪くはないぞ」と彼は思った。「少し退廃しているが、一七七六年独立戦争の精神だ。」「よろしい」と彼は思って鏡から退き、その前でぐるっとまわった。留め金のついた靴と、木綿のストッキングがぴったりと脚にあっていた。「これならばうまくいくにちがいない。」彼は廊下に出てマーサの部屋のドアをノックした。「ロシナンテ、朝食だ。」そして、次の踊り場まで降りて行ってペタルをおこそうとしたとき、彼は自分の部屋の前を例のふとった男が通りすぎるのを見た。彼が急いで物陰にはいると、フランシ

スがずしずしと重い足音を立てて歩いて行った。

「すごいもんだ」とマイルズは壁の奥まったところで思った。床板が足の下でふるえたのだ。「まるで地下鉄の電車とすれちがうようなものだ。」

「あなたはきっとわたしが知らないと思ってるんでしょう」とマーサが部屋のドアからだらしのない声で言った。彼女がガウンのボタンをかけようともしないことに彼は気がついた。「でも、わたしは知ってるわよ。ロシナンテっていうのは馬のことだわ。」それから彼女はドアをばたっと閉めた。マイルズは廊下をもどって自分の部屋のほうへ行った。彼は靴下どめを片方つけるのを忘れていた。ペタルはおきているにちがいないと彼は思った。彼女の部屋からしみ出てくるラベンダーのかすかな匂いがした。ラベンダーだ。すると木曜日のはずだ。一つの影が朝の光のなかで彼のそばを通りすぎたとき、彼はふいにびくっとした。「ジョッコー！　びっくりするじゃないか　おい！」

今ジョッコーは彼から一メートルほどはなれたところに立ち、体を緊張させて、即座に飛びかかりそうに片足で平衡を保ち、もう一方の足は膝のところで軽く曲げ、跳躍しようと身構えているダンサーのように足の先を床に向けていた。「黒い服を着るのは是非ともやめてもらいたいな」とマイルズは彼に言った。「どう見ても死刑執行人だ。」

「わたしは待っているんだ」とジョッコーは言って、手すりのほうへ少し寄った。「彼のトーストをまたあの女が焦がすんじゃないかと思ってね。」彼は手すりに寄りかかって階段の下のほうをのぞき、ふとった男が階段の最後の円形になったところをまわって、家の木造部分をふるえさせ、大きな足音で鉄製の部分をひびかせ、ゆっくりと、ぐずぐずと、疑わしげに、暗がりをおそれる男のように進んで行くのを見ていた。

ジェレマイア・フランシス・スキャンロン、フトッテ、頭ガ禿ゲカカリ、三十九歳ニナルコノ男ハ日曜日ニヤッテキタ。汽車ニ乗ッテキタセイデ汗ガ黒光リシテイタ。何ニ反抗シテイルノカ、何ニ向カッテイルノカ、彼ニハワカラナカッタ。彼ハ線路ノ狂気ヲ感ジ取リ、トンネルニハイルトキニハ固ク目ヲトジタ。汽車ニ乗ッテイルアイダズット彼ノ向カイ側ニハシドニー・グリーンストリート（一八七九―一九五四、イギリス生まれの舞台俳優、一九四一年から映画にも出演した）ニ似タ男ガ腰カケテ、キタナイ爪ヲシタ女ニ、既視症ノ意味ニツイテ話シテイタ。

彼は急いで朝食をすませた。冷たくなった卵を食べ、腕時計を見た。まだ十二分間の余裕があるとわかると、立ちあがってコートを取りに行った。

彼は身をもがくようにしてやっとコートを着たが、ボタン

が胸の上で張りつめているのに気がついてうろたえた。マフラーを首に巻き、それから前かがみになり、じっとして、しばらく鏡の前に立ちどまっていた。そとの通りに出る前に自分の姿を最後に一度見ておくのはいつも必要な仕種だ。そうしておけば、いざというときには自分で自分自身を呼びおこすことができる。そして、それはしばしば必要になるのだ。

蟇。ミルダは彼のことをそう呼んで、彼がこの背広を着ていると蟇のようだと言い、フランシスは自分の顔のふとった白さをきわだたせている緑と茶色のまだらのツイードの服を見つめ、蟇のことは考えないようにつとめた。この服を売った男は、これが彼の髪や目の色によく合うと言った。だれでも自分の色を考えなければいけないと言った。彼は少しうしろにさがって、まんざら悪くないと思った。彼の髪は次第にうすくなってきていたが、柔らかな薄茶色で、目も薄茶色だった。うん、おれの目はもっと青くてもいい、と彼は思った。彼の目の表情はうすれて鈍く、何か以前は愛されていたのに一晩雨のなかにほうっておかれた物を彼に思いおこさせた。三輪車だろうか？　彼にはわからなかった。彼はそこに立って、ふとった肉を見つめていた。そうだ、とフランシスは胸のなかで思った。そうだ　おれはふとっている、これはどうしようもない。そして、彼は思いまどい、自分を見つめながら、どうしてこんなことになったのかと考えた。おれはふとっていて、白くて、みんなの目にとまるようにでっぷりしている、だから、どうしておれは自分を忘れることができようか？　しかし、彼は自分を忘れ、そのことで彼は溜め息をついた。どうしようもないのだ。じっさい彼は自分のことをまったく思い出せない日が何日もあった。そういうとき、彼が知覚するもの、彼の存在は、ただ山のような脂肪の雪崩だけとなり、それが彼の上に落下してきて、彼の視覚をも、聴覚をも、呼吸をも遮断してしまう　ドロドロニ溶ケルヨウナ豚ドモメ、ト向カイ側ニ腰カケテイル男ガ言イ、列車ハゴーゴー、シーゴーゴー、コーコートイウ音ノナカヲ容赦ナク揺レナガラ進ミ、食用豚ノ汗ノニオイガバターノヨウニ彼ノ舌ノ上ニタラタラト流レオチタ。脂肪の雪崩はそのなかに彼をのみこんでしまい、彼は恐怖のあまり、自分がどこにいるのか、自分がだれなのか、自分が何ものであるか、いっさいを忘れてしまう。しかし、いつもと同じように、山のような脂肪は退却し、残された彼は激しくあえぎ、懸命になって息を取りもどそうとした。そのあと何時間も彼はひとことも物を言えないのだった。そして今こういうふうにして彼は立ちどまり、鏡の前で必死になって、黙々としてすべてを貫き通すようなまなざしで見つめ、顔をガラスに近く寄せ、自分の存在を決して消えることのないように自分の精神に刻みつけようとしているふうだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

突き進んで行く列車のそとに彼はふとある物に気づき、窓のほうに目を向けると、オートバイに乗っている一人の男が見えた。背中に赤い鷲の絵を描いたその男は列車と競走していた。

「気違い小僧め」と彼の隣に腰かけている男は言ったが、興味をそそられて体を乗り出した。若者は列車に追いつき、一メートル半ぐらいしかはなれていないところを列車とならんで、線路沿いの堅い土の道を突っ走っていた。フランシスはうしろにもたれかかり、若者が前方に疾走して行くのを見て、若者が列車を負かすようにと自分がひそかに激しく声援を送っていることに気がついた。体を前にかがめて、その茶色の革の上着は風をはらんで風船のようにふくらみ、車輪のうしろに埃を舞いあげ、若者は競走をつづけ、フランシスはついに相手が先に進み出て道路を曲がり、はずみあがりながら坂の向こう側に消えるのを見た。あいつは見事にやった、と彼は思った。あいつは列車を負かした。

「あの若者の勝ちですな」とフランシスは喜んで、通路の反対側の男に言った。

「気違いですよ」とその男は言った。「近頃の若者は頭がどうかしているんです。だれがどう思おうといっこうにかまわないんですからな。」

まったくそのとおりだ、彼の心は躍った。彼はまた振り向いて、あの上着の影でも見えないかと窓のそとを見た。

突然、彼は冷たい風を首すじに感じた。トンネルが近づいてくる。その息、その黒々とした顔が迫ってくる。トンネルは彼を吸いこんだ。世界は彼の周囲で暗くなり、彼がしっかりと座席にしがみついたとき、彼にはわかった。この車輛は黒人でいっぱいだった。数千の黒人が詰めこまれ、黒い顔をガラスに押しつけていた。彼らはゆっくりと彼の上に這いあがり、熱気でむっとする闇のなかに彼を押しこめ、ついに彼は息ができなくなった。彼が体をうしろにそらせ、顔をめぐらすと、彼らは通りすぎ、彼はそこに腰かけて、顔から汗をだらだら流していた。必ず　必ず彼らはおれを殺すだろう。彼らの声が至るところに聞こえた。彼らがひそかに交す低いうなり声だ。黒人たちが陰謀をたくらんでいる声が彼には聞こえた……彼らの喋る声のなかにはあの不思議な内部にひそんでいる秘密があらわれていた……黒人はその内部に一つの秘密をもっている。彼にはそのことがわかった　今わかった。彼の目が固く閉じ、彼は懸命になって聞こうとつとめた……なぜならば彼らは知っているから

だ。ほかの人間が知らないあることを彼らは知っている。彼にはそのことがわかった。それが見えた。彼らの知っていることが何であるか、それがこちらからは見えないように彼らが黒くなったのだと彼にはわかった……隠しているのだ。彼らは隠している。黒人たちはあの黒い皮膚という服のなかにジッパーできちっと締めて何かを隠し、そして今　今彼らは話し、喋っている……彼には黒人種が喋っているのが聞こえた……車輛は勢いよく走り、喋り声は柔らかな雲となって立ちのぼり、列車は揺れ、子供たちは眠り、そして彼はそこに白くじっとして腰かけ、わかっていた。車輛のなかに惰力が次第に増してくるのが見えた　それが肌に感じられた。黒人たちは列車など要らないのだ。列車が突然なくなったら、おれはどうなる？　おれは野原のなかで座礁して横たわっているだろう。しかし彼らは？　彼らは何ごともなかったように前進して行く。席に腰かけていれば、彼らだけが交す低いうなりのような喋り声が彼らを先へ先へと運んで行くだろう。黒人たちは、と彼は慄然として恐怖をおぼえながら感じた。黒人たちは、列車があろうが、なかろうが、行きたいところに行きつくのだ。

彼がふるえていると、列車は駅に到着した。

「焦がしたぞ」とジョッコーが手すりから体を乗り出して言った。「たしかに焦がした。」

このスーツケースは便利なのよ、と彼の母は言った。いつも便利な彼の母はいつも簡便な服を着て、何かの役に立つようにしていたが、そんなことになんの意味があるのか？　時勢と、環境と、不合理の重荷の便利になるために彼女は簡便な服を着ていて、とうとう彼まで仲間に引き入れた。だから今彼は栗色のスーツケースを網棚から取り、機関車の噴き出す蒸気を通りぬけて車外に降り、自分の行く道を見つけようとした。

スーツケースは底のほうが見苦しくふくらみ、裂けはじめ、薄い皮があちこち不規則な形になって剝げ、その内側の白い表面をさらけ出していた。彼は周囲を見まわし、スーツケースが猿の尻のように赤く、ざらざらで、むきだしになっているのをだれも見ないようにと願い、そして急いで歩いて行った。

「その違いはだな」と老人はいつも一オクターブ高い声で喋り、少年は喫茶店の窓のそとをのぞきながら、たぶん年寄りのユダヤ人というものはそういう話しかたしかしないのだと気づいていた。少年はオートミールを掻き

まわし、窓のそとを見て、自分たちの乗る汽車がくるまでにあとどのくらい時間があるのかと思い、自分の祖父のことを残り物だと考えていた。割にいい残り物だが、何か時代と食いちがう不快な味をもっているのだ。それから彼はふとった男が、猿の尻のように赤くて、ざらざらで、むきだしのスーツケースを持って、重い足を引きずりながらプラットフォームを歩いてくるのを見た。ウェイトレスがよごれた指を皿に突っこんだままバターを彼らのテーブルに持ってきた。そして、少年はふとった男のスーツケースが破れるのを見た。

「詰めすぎだ」とフランシスは腹を立てて言い、うろたえた。詰めすぎだ　おふくろがたくさん入れすぎたんだ。彼は母親に向かって言ったのだ。彼は母親に向かってそんなことはしないでくれと言ったが、そのときスーツケースはばっと口をあけ、彼の身のまわりの物がプラットフォームの床一面に散らばった。すべての物、彼はすべての物をかきあつめたが、母親が「パジャマが濡れるといけない」と言って円いナイロンのケースに入れた歯ブラシが駅の床のずっと向こうに転がって行ったのを見た。ぼろぼろのシャツを着て無精髭を三日ものばした一人の男がそのそばに立って、フェリーの着く桟橋の手すりにもたれかかっていた。助けを呼ぶべきだろうか？ちょっとすみません、それをこっちへ投げてください。わたしのなんで。いや。自分で取ってこよう。このくらいのことは自分でしなければいけない。ほんの一、二メートルのところだ。彼は這いはじめ、スーツケースをその場に残して歯ブラシのほうに向かったが、そのときだれかが背後で動く音が聞こえた。それから、遠くで歌の曲が始まってメリー・ゴー・ラウンドのメロディのように流れてくるのが聞こえた。反対側のほうから彼のスーツケースに向かって、もう一人の男がやってきた。その男は、手すりにもたれかかっている男と調子を合わせて口笛を吹き、二人はいっしょになって薄笑いをしながら、ケイシーハ苺（イチゴ）ブロンドノ娘トワルツヲ踊リ（一八九五年、ジョン・パーマー作詞、チャールズ・ウォード作曲、《バンドは演奏しつづけた》の一部。一九四一年、映画《苺ブロンド》でリバイバル）、と歌い、歯ブラシのほうの男が動かずに、警戒して、誘いをかけているあいだに、もう一方の男がフランシスの荷物に向かって進んで行った。スルトバンドガ演奏シツヅケタ。「おい」と彼はかすかな声で言い、立ちあがってそのほうに駆けて行った。「おい」と言って彼は駆けて行き、男をつかまえようとしたが、男は飛びのいて走り、どんどん走って行くので、フランシスは「おい」と叫んだが、おいというどなり声がのどにつかえ、そのとき男は突然立ちどまり、フランシスを自分のほうに向か

ってこさせ、彼のほうに向きなおり、微笑しながら、「いいか　おれはこいつをかっぱらおうってんじゃねえんだ」と言い、手を下にのばして注意深くスーツケースをあけて、中身を床一面にまきちらした。それから、その男は歩いて行ってしまった。フランシスはくやしさに耐えかねて目に涙をうかべ、顔が屈辱感で焼ける思いをしながらも、きたならしい床から下着類をひろいあげた。彼はスーツケースにぎっしりと詰め、留め金がこわれたまま腋の下にかかえこみ、もとへもどり、怒りで顔を赤らめ、歯ブラシを取り返そうとした。「すんません」とフランシスは言ったが、口のなかで舌が横に滑った。「すんませんが。」（わたしはあなたの空間を邪魔しているわけじゃないでしょう？　わたしの歯ブラシがあなたの影のなかにあるんですが、もしあなたの影があなたの空間のなかにあるとしたら、わたしは邪魔していることになるんでしょうか？）

「すんませんが」とフランシスは言って、かがんだ。歯ブラシは桟橋の端にあり、フェリーはすでに桟橋のあいだの水面にはいってきていて、ぎしぎしとこすれあう音を立てていた。フランシスが体をかがめて歯ブラシを取ろうとしたとき、男はそれを桟橋の端から蹴飛ばして、下でうずまいている水のなかに落としこんだ。男は「どうもすまなかったな」と言って顔をそむけた。**おい　おれに向かってそんなことはさせないぞ　おい　そんなことは**　彼は頭のなかのずっと遠くのほうで金切り声をあげた。もちろん、もうやられてしまったあとだからだ。祖父が言った。「おい、おまえ　聞いているのか？」

「うん。」すると老人はしばらく話をして、小声で笑い、オートミールを少し髭にたらしたが、少年は笑わなかった。取るに足らない子供だったが、なんらかの方法による報復が自分の力の及ばないところにあるということは笑いの原因にならないとわかっていた。しかも、こんなに朝早くでは駄目だ。

フランシスは身のまわりの品を集めて、フェリーに乗りこみ、あと半時間もすれば自分がミセス・フリンの家にいるであろうことを不思議に思った。少年とその祖父は立ちあがった。祖父はバターを見たが、チップを置いていかなかった。

「きたならしい馬鹿じじい」とウェイトレスが信じられないという顔つきで言い、テーブルから皿をかたづけた。「ねえ、どう思う？　チップなしよ　馬鹿馬鹿しい。」

「あんたの態度が気に入らなかったのかもしれないな」と黒人が言って、椅子に腰かけたままぐるっと体をまわ

した。ウェイトレスはにらみつけた。「態度？　態度だって？　何を間抜けなことを言ってんのよ。あたしはくだらないコーヒーをついでお金をもらってるのよ　週給四十五ドルでお客をかわいがってやる仕事までしなくちゃならないの？　態度なんて、屁のかっぱ。」

「ねえちゃん　あんたの言うとおりだ」と黒人は言った。

その朝、あのごろつきたちは餌食をもとめていたのではなかった。彼の歩きぶりにつきまとっている何ものかが彼らの感興を湧き立たせたのだ。そして、もちろん空中にただよう何ものかがあった。

男はコーヒー茶碗の上に頭をたれて、今日の仕事をどこで見つけたらいいかと思い迷っていた。疲れて、疲れ果てた。人生とは疲労だ、故郷へ帰ることにでもするか。

（「黒人たちはなんで苦しんでいるのでしょうか？」と先生が言う。生徒はみんな手をあげる。彼らは大声で叫ぶ。

メイトリアーキー（「女族長」という意）。
古くさいマラーキー（「くだらない話」という意）。
ハイアラーキー（「階級制度」という意）。
彼らはダーキー（「黒んぼ」という意）だ）。

「さあ　これを使っていいわよ」とウェイトレスは、そろそろ男が勘定をするころだと見計らって微笑し、新しいミルクの容器を彼のほうに押してやった。（もしわたくしたちが親切であれば、それで万事はうまくいくのではありませんか？　一政党の利益のために勝手に選挙区を改正しようとしても、憐憫の情はそれを打ち負かせるのではありませんか？　そうですと彼らはまた大声で叫ぶ。フットボールのチャンピオンが大ぜいの肩にかつがれて、トロフィーを振りまわしながらフィールドをやってくる。みんなはチャンピオンを誇りに思い、あこがれている。「ぼくのアルバムにサインしてよ　リロイ　ここにサインして　ここにサインして！」応援団長のブロンドの巻き毛がさらさらと揺れて彼の頬にキスをする。）彼はミルクを押し返して立ちあがり、出て行こうとした。店のなかの途中まできて彼は立ちどまり、ポケットに手を突っこんで小銭を捜した。態度はちゃんとしておくんだな　黒人の二十五セント玉がカウンターの上で鳴った。生きかたを変えるんだ。

こうしてジェレマイア・フランシス・スキャンロンはわざとほかの乗客からはなれて、注意深く救命浮環の下の座席を選び、蠟を塗った黄色い木の椅子に深く腰かけ、海というより、このあたりでは港が川になっている

ので、川を渡り、しっかりとスーツケースにしがみつき、無念のあまり歯で下唇を噛みしめながら、自分の行く手に待っているもののことを気づかわしく思いめぐらしていた。鷗が船のまわりで騒がしく鳴き、食べ物の滓を捜し出していたが、やっとその鳥たちが退却して行くと、船はエンジンを猛烈にふるわせて逆回転させ、波を切って進み、ニューヨークの側にはいって行った。

黒々と沈んでいる水のなかから白い泡が噴きあげてくるのを彼は見まもっていた　ここではすべてが新たになる、と彼は思った。ここでおれは自由になる、自由にされ、自由のままでいるのだ。ほかの人間とは違うのだ。このスーツケースのなかにはいっているのは新しいものばかりだ。スーツケースそのものだけが擦りきれて疲れているにすぎないのだ。それから彼は血を味わった。舌の上にわずかにしたたった血を味わった。また歯のしわざだ。あまり強く噛んでいたので感じなかったのだ。今の彼の感情は快い期待ではないことは明らかであるはずだった。そういうものはずっと以前に彼にはあたえられないものになっていた。今の彼の気持ちは不安だった。期待とは違って楽しくない代用品だったが、それにもかかわらず彼はそれを生得の権利の一部として大切に胸の奥深くに抱いていた。

彼はすぐにニューヨークに着いた。

ドアがうしろで閉まり、地下鉄のプラットフォームに立ったとき、彼はその狭い出入口から脱出する方法を考え出すのに数分はかかるだろうと悟った。だらっとした彼の肉は、目的もなく積みあげられた砂のように彼の体にくっついて動き、つねに彼の進行を不確かなものにした。スーツケースがあるので、いっそう厄介だった。彼はぐるぐるまわり、さんざん苦労し、ごりごり押した。虐待されたスーツケースは今は血を流し、皮がむけているのを彼は見た。スーツケースが先に通りぬけ、それから彼は巨体をできるだけうまく横に向けて滑りぬけた。人に見られないですめばいいと思った。乗車用メタルを売っている駅員が彼を見つめて溜め息をもらした。この駅員は猥褻なものならばなんとか処理できた。自分で配ることもできた。駅の壁はそういうものをもとめて叫びをあげていた。しかし、下品なもの、だらりとした肉のかたまりが目の前にさらされると、彼は不快感におちいり、周囲をかこまれた席に着いている彼は傲慢に鼻をふんと鳴らした。

フランシスはそんなことには思いもおよばず、だれも人の姿が見えないので、その瞬間をとらえて睾丸を掻いた。彼はそうしながら両目を固く、しかし静かに閉じ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo